

第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

小学生の部 優秀賞 受賞作品

いってらっしゃいお父さん

神奈川県
湘南ゼミナール 能見台教室
小学6年 宗村 碧

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「いつてらっしゃい。」母は晴れた日も、雨の日も私を団地の坂の上から見送ってくれた。この習慣は六年間欠かさず続いている。変わったことといえばお伴の犬が二匹目になったことだ。私はこの言葉を聞くと心に火がともり元気がでる。

私がランドセルに押しつぶれそうな小さな一年生の頃、大きな上級生が怖くて、学校に行く時、足取りが重くなった。母も小さな私が心配だったので。歩道橋の近くまでついて来て「いつてらっしゃい。」と見送ってくれた。この言葉のおかげで、勇気が出て、めげずに学校に行き一年生の終業式には先生から皆勤賞をもらった。それをもらった時の母の笑顔を忘れられない。その時私は感じた、なぜだか「いつてらっしゃい。」にはとても勇気づけられる不思議な力があると。

今、私は六年生。背も伸び、学校にこわいものはない。でもたまに、ささいなことで友達とケンカしたり、水泳の時に良いタイムがでなかったりすると、気持ちが落ちこんで、翌朝学校に行きたくなる。でも、いつものように「いつてらっしゃい。」と母が言ってくれると私は不思議なことに前向きな気持ちになる。その後、学校に着くと、友達に素直に謝ることができたり、水泳で好記録をマークできたりする。六年生になってやっと気づいた。一年生の時から感じていた不思議な力は母の愛情だったことを。「いつてらっしゃい」には、言葉をかける人の思いがいつぱいつまっている。「元気で。」「気をつけて。」「無事帰って来て。」と込められる思いは愛にあふれている。

私の父は群馬県に単身ふにんしている。金曜日、私が寝た深夜に帰って来て、月曜の早朝に出社する。最近よく父が「つかれた。」と口にするのを聞く。土日も寝ていることが多いので心配だ。今まで、私は父を見送ったことがない。そうだ私はもう六年生。これからは私が父を見送ってあげよう。六月のある月曜日私は早起きをし、父を駅まで見送った。駅の改札での別れぎわ私は大きな声で父に向かって言った。「いつてらっしゃい。」その時私には父の背中が少しピンとしたように見えた。